

# 老子に於ける道と生活との具体的關係について

葛 川 芳 久

## 小 序

人間が物的存在であるより人格的存在であることに意義を認めてきた東洋では、常に分化を通じて統一を徹見せんとする所にその精神的特色をもつてきた。具体的生活体験を通じて實在を端的に把握し、人爲を去つて自然の生命を感得しようとしたのである。従つてその表現も多くは含蓄的、象徴的、飛躍的、断片的である爲に、概念的思惟に偏してしまつた現代では殊に容易に理解されず、学者から却つて誤解され、少し深い体験でもすぐ独断、独善であると排斥されている。老子莊子の如きはその尤なるものであらう。さなくとも、その無なる道、無爲、無我の消息は常識生活では容易に分らず、言辞で表現し難きに於てをやである。

現代人は口を開けば東洋の思想家には論理がなく直観的であると蔑視するが、思想と論理とは不離のものであるから、東洋でも論理を無視するわけではない。論理的思索と体験を積む中に自然に得られた深遠豊富な直観で、その点だけを言辞に記した爲、含蓄的象徴的となり、又飛躍的断片的であつたのである。従つてその中から論理的内容をいくらでも抽出し得るのである。東洋の思想家は論理や概念的思惟の能力や限界を直観していたともいえる。従つてはじめから知識の体系を立てるといふやうなことを問題にしてはいたのではない。老子が道を尋ねるに、所謂形而上学的思惟をやつていふやうに見えるが、それは表現上の問題で、本來實在についての知識などを問題にしたのではない。單なる思惟上の問題ではなく、至生活の体験に基づく「無我」の事實から出発している。この点を明かにしない爲、從來誤解が多く、この専門の学者でも不消化であると謂えよう。

そこで東洋の思想を研究するには是非とも觀念の遊戲を去つて、その一語一語の含む深い体験を吟味しなければならない。然るに「分化」一辺倒となつてゐる近代学の傾向では、學問は實踐と分離して、概念を明析にし論理を精確にし法則を探求し、知識の体系化といつた科學だけが學問で、實踐的なものは非學なりと錯覚している。この近代学の獨善的な迷妄はいかげんに打開されてもよい頃であらう。本篇は、無、無爲、無我、無欲、宇宙の生命といつた言葉で表現される老子の「道」を人間生活との具体的關係に於て少しでも明かにしようとするものである。ここに老莊といわないのは両者の生活態度に自ら多少の差異のあることによる。

## I

春秋より戰國時代の社會相と人間生活の不安迷妄苦惱斗争の現實を直視した老子は、人間はそれ等の中より救済されて自主自由となるべきであるとの至願を抱いた。そしてそれを生活の改善や礼法制度や社會改造等に求めず、その根本的原因を人間の裏に深く沈潜して、徹底した内省に求めたのであると私は考える。

人間は自我にめざめると自己を他より孤立した存在と考え、自ら外設を作つてその中に於て考え行ふようになる。自己は自己で守らなければ成り立たないと考え、「寵爲上、辱爲下、得之若驚、失之若驚。」<sup>(1)</sup>して「貴大患若身。」の状態である。その久しい結果、少し心を平靜にして自己の姿をありのままに調査すると、怒、憎、不平、不安、依頼、意地、欲求、嘘偽、怠惰、虚榮、排

他等々の混乱したものであることが分る。従つて生活のどの一点をとつてみても、金（物）で苦しみ、人と人との関係に悩み、仕事（職業）の意義を失つて、実につまらない人生としか思えないこととなる。

勿論これまでになる間には、所謂教育も受け、多少修養にも志し、学説思想を研究し、自己を善いもの、しつかりしたものにするべく努力もしている。その間多少は心持も穏かになつてゐるらしいが、止めると餘計の淋しさがつきまとう。それ等の学説や指導原理、精神科学、学校的教育や学問は、理論や講義としては筋立つていても、それが自己の生活の中に入つてきて、混乱した気分生活を統一し、実人生の指導力となることは容易ならず、又それ程の力もない。老子の時代に於ても、儒墨はともに理想精神を失ひ、自己欺瞞、虚栄偽善的なものとなり、却つて狡猾な實際家に利用され、「諸侯の門に仁義存す」という如く、支配階級の奴婢へと墮落して、人間の本質に對する自覚もなく、その指導力を失つてしまつていたのである。

そこで自ら承認出来る生活原理を立ててみるが、亦その自信がぐらつく。その中に、これは社会や政治の缺陷不合理から自己の生活も混乱するのであると考へて制度論を称え、時には社会革新の運動も考へる。その半面遂に何事も客観的な因果律に帰して、自己に關する責任も罪惡も世に転嫁してしまふようになる。かく一方には自己の内心を修めようとし、一方には外界の状態を整理しようと試みるが、何ともならず、たゞ困憊疲労が残るのみである。そこであきらめとごまかしが起り、自己だけが悪いのではないと自らの欠点を寛うして自己辯護をして、それを唯一の頼りとして、天地に恥ぢない絶対的な自己であることは分らなかつたのである。

自己に少しでも價値を認めてゐる間は自己に生きる價値を認め、自己が生きよう自己を生かそうとする爲、自己の周囲に殻を固くし（金、地位、名譽、知識等々自己を守らねばの種類は沢山ある。）他人に對して自己の殻の大きさを以て對抗しなければ自己が存立して行かないと考へ、その爲に欲をしなければならぬ。そこで「難得之貨令人行妨。」<sup>(47)</sup>で、この殻が固くなればなる程、生命の力は下積にされて、生活そのものは行詰つて行く。まことに「人之迷、其日固久。」<sup>(48)</sup>である。

「咎莫大於欲得。」<sup>(49)</sup>で、欲を止めれば人生苦悩の大半は溶けて無くなるとは知りながらも止め得ないのは、欲より更に深い所に在つて欲を操つてゐる「我」（論語の手裏四では我であり、老子では私の字を使つてゐる。）による。「我」は生命が素直に伸展せず、調子よく成長しない姿で、「我」がある限り欲をしないわけにゆかず、何時も人間は不安を覚え、窮屈で淋しくいぢけてしまふ。「我」と「不安」「執着」「欲」は同じものの異名か、互に連続したものであろうか。「我」があると自他は別々のものとして隔離され、対立對抗が必ず起り、そこからあらゆる人間の問題が出来るのである。「道」と「我」とは両立しないもので、「我」が碎け溶けるとその後「道」が起る。古より宗教道德法律ともに皆「我」の魁分に終始してゐたといつても過言ではない。そこで「道」を明かにする爲には「我」の研究をすればよい。（老子は「我」そのものの正体については徹底した内省に於ける問題として言辭にはあまり示していないが、「我」を知らなければ道が明かにならないという意味のことは隨所にうかがえる。）

「我」は愧ぢない詫びないもので、外側からいかに強大な力を以てしても碎くことは出来ない。殊に外からの力に「我」が少しでもあると、こちらの「我」を刺戟し挑発して益々「我」をつのらせ強硬にして、どこまでも對抗するのが「我」の特性である。（今まで「我」に悩まされながらもその正体に気付かない為、見当違の手当ばかりを加えていたのである。）「我」を碎く唯一の道は「無我」を以てするより他に方法はない。「我」が「無我」の引接にあつると、こちらは自己の「我」に氣付かざるを得なくなる。こゝに「無我」の人格「無我」の教の妙なる働がある。老子は「聖人之不病、以其病病。是以不病。」<sup>(50)</sup>といつてゐるが、自ら自己の病、姿に氣付くことが道がわかる

唯一の法である。(老子は自らの「我」をいかにして砕いたかにはふれていないが、道の師、道の教によつて気付かされたことと思う。孔子は克己の生活を以て志学より「従心所欲不踰矩」という域に「我」を溶いたが、孔子は儒家的徳義や、不可思議な術や魔法を用いることはないと考える。この点老子の傳記、特に師承の十分知れていないことは遺憾である。又この意味に於て「教」が自覚の上に極めて重要な地位をもつことを詳述すべきであるが、紙面の都合でこゝには省略する。)

「無我」なるものは「我」に対するとその苦悩を憐んで救済の慈悲心を起す。「我」はその光に照され「無我」の慈悲に感じて自らの姿に氣づかされて自己を慚愧する。懺悔とは自己の「我」に氣づいて慚愧し、自ら進んで罪の責に任じようとする姿である。即ち自己の生活が内面的に行詰つて、もはや生きる價値資格なしという感じになつて、自己全体を投げ出してしまふ。この時「我」の固い殻が砕けるのである。「塞其兌、閉其門。」<sup>(62)</sup>といひ「挫其鋒、解其忿、和其光、同其塵。」<sup>(63)</sup>といふのは欲の源である「我」を砕く意味であろう。ここに至つて全面的に苦悩の根源が除かれることとなり、下積されてきた眞の自己、生命が生き反り、道が開かれるのである。寧ろ生命のあたりまえ(常)に帰るのである。老子には「帰る」とか「常を知る」といふことを屢々言つている。(「乱物芸々、各復其根。歸根曰靜、是謂復命。復命曰常。不知常妄作凶……」<sup>(64)</sup>とか、「用其光、復歸其明、無遺身殃。是謂襲常。」<sup>(65)</sup>といつているのは皆「我」が砕かれて生命の常態に帰ることを知るべきことをいつたものである。「知常」であれば「汝身不殆」であるが、常を知らざるものは「我」を固執するから妄作となり凶である。)これ即ち「我」の迷妄が溶けて生命そのものの姿(道)に帰ることで、この統一的一者を厚く抱くことである。これによつて生氣を湛え、清淨な力の感、賑かな氣に満ちた生命そのまゝの活動が起つて、色々な徳が限りなく現われる。「爲道者、日損、損之又損之、以至於無爲。無爲則無不爲」<sup>(66)</sup>である。老子の言辭の半はこの徳の働を称えたものとみてよい。さてこゝに徹底した内省は「無我」を發見せしめたのである。

## II

さて「我」が砕けるとあらゆる不平不足が無くなる。不平不足は自ら好んで思うのではなく、これを無くする方法があれば無くしたいのであるが、その見当も立たなかつた。外側の生活はいかに幸福そうな事になつていても、不平不足がある以上、人間の幸福はその中心部に於て破壊されてしまふ。長い間外側の事情が此方の注文通りになることを求めたのであるが、(社会の組織や制度、経済や仕事、家庭の事にしても決して自己の思う通りになるものではない。周囲の人々が自己の思う通りの都合のよい人間になつてくれるように依頼し運動して廻つても、時節を待つても無駄な苦勞である。)外側の変化によつて不平不足を無くすることは出来ない。そこで自ら修養し、心の持方を変えて努力してももはや絶望である。克己の修養には強固な意志と知慧と努力を伴わなければならず、心の持方を変えようとするとその下から限りなく不平が起る。不平不足は自己に價値あり資格ありとする所より起るもので、生きる資格なしとして投げ出して「無我」に氣づくことに於てのみ根源からこれが解消される。老子は「知足不辱、知止不殆、可以長久」<sup>(67)</sup>といひ、更に「禍莫大於不知足。咎莫大於欲得。故知足之足、常足矣。」<sup>(68)</sup>とある。こゝに「足」というのは心の持方を変えて現在に満足するという宿命の意味ではない。「我」ではそのやうなことは出来ない。老子の「知足」は「無我」では不足が起らない意味に解すべきである。老子には「知足」より更に深刻な言葉がある。「不敢爲天下先。」<sup>(69)</sup>「後其身……外其身。」<sup>(70)</sup>というやうに謙下して低い処に身を置くのは人格の空虚より來た懦弱謙下ではなく、「我」の溶けた者としては誰よりも上位に立つまい、衣食住は最下でよい、地位身分はもとより自己の姓名すら無いものにして、生かされる生命の力のまゝに進もうとする純化され充實した眞の自己の願からである。老子のいう「曲則全、枉則正、窪則盈、蔽則新、少則得、多則惑。是以聖人抱一、爲天下式。不自見故明。不自是故彰。

不自伐故有功。不自矜故長。』<sup>(35)</sup>も決して功利処世法を單に否定的に逆説的に述べたものと解すべきでなく、謙下して、たとえ星下に身を置いて争はずとも、生命の力を得ているものは窮するものではないことを謂つたものと解すべきである。

「我」が溶けると心の底に滞る不平不足が溶けて、其の根に帰つて心の健康を取返し、平靜で妄念妄想は起らなくなる。即ち「致虚極、守静焉。』<sup>(36)</sup>で、心の中は虚で、心の中に入り来るものは少しももて余さず、その時々 of 当面の事を適切に処理することに専念することが出来、更にそれ等を自己の生きる養にさえして、生き生きとした活動をすることが出来る。「天地所以能長且久者以其不自生。故能長。』<sup>(37)</sup>であり、「無爲則無不爲』<sup>(38)</sup>であり、「天之道不爭而善勝。』<sup>(39)</sup>である。

前述の如く「我」は生きることが順調活潑に進行しないで、そこに停滞が出来、こりが出来、生命の調子の狂つた様々な姿である。そこで「我」が溶けるとその後生命本来の姿、生きることの本調子が復活してくるのである。元來「生きる」ということは常識では自己の力で生きていると思うが、自己自己と自己だけを別にして考えるのは「我」の働である。「我」が溶けてからは自己の生きているのは、実は生かされて生きていることが分り、生きる働と生かす働とが一つのものであることが分り、そこに自己の生命について（従つて生活について）これまで考えていたのとは全く異つた考え方感じ方が出て来る。今までは自他の生命は全く別々なもので、その間に垣で隔てられているように思はれたものが、相通じた一つのものであつたことが分り、それを押及ぼして終には天地を貫き一切に通ずる宇宙の生命という所までに通じた自己であることが分らせる。そこで「我」が溶けることと、「無我」と、本当の力（生命）に氣付いて自己がそれに生き出すということと、宇宙の生命に通ずる、道が分るということとは同時に出来ることで、一方だけということは絶対にない。

老子の道、徳の自覚体認は此の如き事実によつたものであると私は考える。

### Ⅲ

老子は曰う、

有物混成、先天地生。寂兮冥兮。獨立而不改、周行而不殆。可以爲天下母。吾不知其名。故強字曰道。強爲之名曰大。<sup>(40)</sup>

道は永久不変の實在で、凡ての現象に行き亘つて普遍的に存在する或る物で、そこからあらゆる事物を生ずる根本的な生命であり、本体そのものである。

視之不見、名曰夷。聽之不聞、名曰希。搏之不得、名曰微。此三者不可致詰。故混而爲一。其上不皦、其下不昧。繩々不可名。復歸於無物。<sup>(41)</sup>

道は人間の知覚を超越した渾然たる一つの存在で、道そのものは「無物」で、なにものでもない。その存在の状態は「無狀之狀」「無物之象」で、又「惚恍」ともいえる。即ち

道之爲物、惟恍惟惚、恍兮惚兮、其中有物。惚兮恍兮、其中有象。窈兮冥兮、其中有信。其指甚眞、其中有信。<sup>(42)</sup>

であつて、又「道可道、非常道』<sup>(43)</sup>であるから道は相対的に表現される何物でもない。「天下之物生於有、有生於無。』<sup>(44)</sup>といえ、道はまた「無」ともいえる。「無」といつても存在を否定した何も無いという意味でなく、相対的な何物でもない絶対無限の玄妙なものの謂である。「道沖而用之又不盈、淵兮似万物之宗。』<sup>(45)</sup>といつているが、道は沖虚といつても單なる空虚ではない。生命そのもので、生命は形あるものでなく一切に遍満した空虚なものである。盈ちたり減つたりすることなく、いくら使つても盡きることはない。これによつて相対界の生成化育が行われ

る。この創造的作用よりすれば道は「玄牝」といふべき永遠に勤めても疲れ衰えることなき根源的母胎である。（「谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門。是謂天地之根。蘇々若存、用之不勤。」<sup>(65)</sup>）老子は又道は生命で万物は個体的にその生命を分有するものである故に、相對界の現象を空とか仮とかは考えていない。然し道は絶対的なもので相對的ないづれでもない。即ち道と万物との關係は一であつて二、二であつて一という所謂「不二」の關係に在ると謂える。

道の本質を述べた老子は更に「……大曰逝、逝曰遠、遠曰反。」<sup>(65)</sup> といひ、「万物竝作、吾以觴其復。」<sup>(66)</sup> といつて、道には「反」「復」の作用があることをいひ、更に「反者道之動。」<sup>(66)</sup> ともいつて、道は自らに出てて化育を行い、その功に居らず自らに反るものである。即ち道の働は自律自慊で、そこには原因も目的もない。目的原因はすべて「我」の作爲より生ずるもので、道にはそれがない。即ち道は「無爲」であり無我無欲である。従つて道は全く自由自在の働をもつている。「道常無爲而無不爲。」<sup>(67)</sup> である。老子は更に

大道汎兮、其可左右。万物得之以生而不辭、功成而不名有。衣養万物而不爲主。」<sup>(68)</sup> といひ、「生之畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰。」<sup>(69)</sup> といつているのは、よく道の「無爲」「無我」にして停滯することなく自主自由に創造的に働く姿を述べたものである。

「孔徳之宥、惟道是従」とあるが、人間は道と対立した存在ではなく、人間が道を体得していることより人間に於ける道の働を「徳」ともいう。（合して道徳という）「道生之、徳畜之。兵之育之……生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄徳。」<sup>(69)</sup> といつているのは、人間の徳は道の姿、働そのものであるとの謂である。

万物の靈長たる人間は皆この道を自覚体認し、この徳を顯現するものである。道、徳こそは自己そのものであつて、人間の生きるということ、生活はこの道、徳の具現に在つた筈である。

### Ⅲ

道を体認しないと、人間の生活は相對的のもので何かを相手ととる所に成立するように考える。人間は誰でも生きる爲には色々の條件が必要で、その條件が揃わぬと生きてゆけないものと考える。その爲、金や物を集め、名譽や地位を求めて怨や欲を働かせ、怒憎嗔策謀の数がきりを見えぬのであるが、その叫ぶ条件でも思ふようにならない。

自己が生きて居られるのは條件が具備して生きているのではない。生れたのも條件附ではない。自己の力自己の計らいで生れたのでもない。一切無條件で生れ生かされているのである。自己の知や欲で生きているのではない。自己の心懸や善行で生きているのでもない。人間はたゞ無條件に生かす力（道）の無量の恩恵（働）によつて生かされているのである。老子はその象徴に嬰兒を以てしているが、それは嬰兒は「無我」で、無條件に生かされている姿であるによる。（親の子に対する愛が無条件の愛で、それによつて子は育つ。親の愛も親自身で持とうとして求めて来たものではない。宇宙そのものが無条件なもので、その廣大無辺な働が親を通じ、また子の生命の中に働いていることがわかる。）「我」「欲」の働で生きているように思えるのは全くの錯覺であり迷妄である。

人間の生れる事生きることが無条件であると同時に、また死ということが無条件である。無条件ということは人間世界ではあり得べからざる事と考えられ、何事も条件つき（それもなるべし）となつてゐるが、これは外面から見た上のことであつて、人間世界は勿論、宇宙一切の事が万事無条件というのか事の実相である。老子は万事条件附であるのに、それを無条件として心の持方を變えたと樂だからそうせよと教えているのではない。事の真相が無条件であるから人間の生活も無条件に帰れといつてゐるのである。

さて、道は宇宙の生命であり統一分化の創造的根源である。人間はこの道から分化したもので、

私という身体はそのままで私はまた道を抱いた存在であり、宇宙を通じて全体としての私である。宇宙と私とは二つであつて一つであるといえる。従つて私は私のものであつて私ならざるものである。老子はこの所を「天下有始、可以爲天下母。既得其母、以知其子、既知其子、復守其母、沒身不殆。」<sup>(5)</sup>といつている。従つて老子は「帰る」ということを屢々いう。この点を明かにすることが無条件の生活（道の生活）の要諦であり、人間の信念の根拠である。然るに私は私だけのものとして分化の相だけに拘泥凝滞して、存在の根源との調和を断つて不調のままに生きようとする所あらゆる人生の問題が起る。今その信念によれる前に「無我」「無欲」について今少しく補足しておく必要がある。（老子には無欲をいうとともに「見素抱樸、少私寡欲」<sup>(10)</sup>というやうに寡欲ということもいつている。そこで老子の無欲は実は寡欲であるという。（馮友蘭の中國哲學史とその他）それでは「欲」や「我」の一部分を認めていることとなるので、老子の無は不完全なものとなつて了う。「欲」の生活しか知らない思想家がその立場で合理的に解そうとするから無欲を寡欲とみようとするのである。「無欲」の真相を明らかにしない為である。老子の寡欲は無欲の一つの表現法にすぎないと私は考える。）

人間は長い間の生活習慣から自身を大切に出来たのはよいが、其処から間違つて自身は自身で守らなければ生きてゆけないと考へ、自己を自己だけのものとする所より欲が起つた。欲をせねば立ち行かない。如何なる欲をしても自己を守らねばならないと考へるやうになつた。そこで無欲というと、腹が減つても食はない、寒くても着ない、眠くても寝ないやうにする、それでは死んでしまわなければならないと考へるらしい。又「無我」「無欲」になると人間は働かぬやうになり人生に張り無く面白くなくなると思ふらしい。それは間違ひである。腹が減つたら食ひ、疲れたら体を休め、病氣には手当をすることは欲ではない。それは「願」というべきものである。人間は宇宙の生成化育という願によつて生かされているもので、この欲と願との二つの事柄を明かに區別しておかないと凡てが間違ひに陥り易い。簡単にいへば、自己は自己の姓名を掲げてはいるが、自己の管理を全体（誰からというのではなく宇宙全体から）から託されているわけである。それ故自己で守らねば生きられない存在ではない。自己を守らんが爲に自己一人孤立して心配する必要はない。其処には全体としての愛の働が必ず起つて自己を生かしているのである。そこで自己は勝手な考をもたないで全力を盡してこの任されたものを大切に育てて全体の爲になる仕事に邁進してゆく。これが人間の本願で又宇宙の願である。道はこの事実を示し、先覺は嘗てこれを体现している。この事実を信することが信念で、生きる根本である。信念は事實の認知によるもので確実性もつている。單なる心の持方を変えんとか、思を修養で固めたものや、迷信的なものではない。

その信念は現在の自己の境遇がいかにあろうとも、自己をかくおらしめている力の恩恵を感謝出来る。この感謝の念は道の働を最も純深に体得する所に動く心持である。それによつて人間は道に徹し宇宙と一つになることが出来る。自己の力を働かせるには相違ないが、それを自己だけの力と思はず、自己の力であつて自己ならざるものの力であることを知つて、それを働かせてゆく所に中心を置き、それに最上の價値を認めてそれを感謝し、結果の如何に拘らず着々として進めてゆく所に道の生活がある。無条件の生活はこの信念を土台として個人の上に家庭の上に社会國家、世界の上に、或は物の上に心の上に、その他色々の問題の上に展開してゆくのである。

身体はもとのままで「我」が溶けていると宇宙の生命がそのままに現われ宇宙と一つに通ひ、孤立した自己でなく世界万人の力、万物の事が自己の所に集つてくる。即ち「天下谿」となる。自己の思ふこと爲すことは世界の凡てに響く。従つて自己だけの地位名譽をちげんことを力まなくてもよい。自己の所へだけ金や物を集めることに悩まなくてもよい。全く融通自在の自己であることが氣づかされる。眞の自由である。（自由ということ自身以外の物の束縛よりの解放なりと考へて

いるが、それは人間動物化した考え方によるもので、自由の恣意的一面にすぎない。自由を決定するのは自己の人格による。従つて眞の自由は「我」の解脱でなければならぬ。そこに外物と人格とも相應じて完成される眞の自由がある。(この氣付かぬかたは「無我」の修行に発するもので、例えば経済上困るのは例々に困るとか、立腹は耐えねばならぬというような教え方とは違う。「我」をそのままにしては少々の手当ではよくなる筈がない。)

食事一つに就ても「我」ですると、自己の力だけで自己が食うのだということになり、人からの御馳走にしても、その人だけの功と思うに過ぎないからその味は小さく、多くは不平を伴う。「我」は凡て物事を対立的にみるから当然である。道を以てすれば限りなき感謝を以てする。「無我」であるからその食事が供せられるまでに盡された多くの働を感じるから、その食事の中にこもつている天地万物一切のものを味わうことが出来るので不平の起る隙がない。品物や金銭の取扱にしても、自己の持つ物は自己の物であつて自己の物ではないということになる。自己だけの物ということになると粗末な取扱にもなり、階級斗争へも発展する。この「不二」の關係を自覚したものには物にも生命を認め、一円の全一枚の紙の扱ひにも妙味は書きないであろう。

人間との關係に於ても亦然りである。「我」のまゝでは自己の妻子親友であると自己を中心とした注文條件が出て、その通りにならぬと不足不満が出る。「不二」の關係に立つてはじめて実に清らかな豊かな親しさが生れる。

仕事(職業)にしても「我」の中だけの仕事であるから怠惰にもなり、やり甲斐もなく、何をして意味がない。そこで何か僅かでも自己の扱以外の事をする。「生而不有、爲而不恃」とは反対に自己の功と名とを私してその極印を押す。これは政治のやうな仕事になつても同じで、自己と仕事との間に隙が生ずる。「我」が溶けていると、たとえ小さい仕事でも宇宙と通じた大きい意味を以て響く。天下を支配するやうな仕事をしても別に誇ることも威張ることもない。たゞ出来るだけのことをする。それは衷心より喜んでいるので、心身悦樂してするから余り疲労もしない。「我」の溶けた人で昔から怠惰な人はなかつたといつてよい。

又心持の上にも心配や立腹が出来ても、自己だけのものではなく、自己だけで悩まなければならぬことなく、宇宙全体の組み合せでその時自己が心配や立腹をしなければならぬことになつたやうなもので、独り責任を負つたり心配し悩まねばならないことはない。宇宙と共に生き、宇宙と共に働き、宇宙と共に遊び心配し喜び楽しむこととなる。自己は自己であつて自己のものではない。そこに自己だけの爲に辯解や心配をしなければならぬことはない。自己の一挙手一投足にも宇宙との感應がある。従つて自己を疎かにしてはならないことも分つてくる。「不二」の味は衣食住や金品や人との間柄、仕事の問題ばかりでなく、山川草木景色といつた所謂自然物についての味も「我」の場合とは全く変らされてくるのである。

道の生活には争う相手がない。常に自己の手許を自由に變えて万事に処することが出来る。「我」では堅く凝り固まつて強そうでは実は弱くゴツゴツと相手に当るばかりで行詰る。老子は道の働をよく水に譬へ(「上善者水。水善利万物而不争。処衆人所惡。故幾道。」<sup>(8)</sup>)又柔弱を以て示している。水は相手どるものが無く突に自由で何処へでも体を移して行詰ることがない。(「天下之至柔、馳騁天下之至堅。……出於無有、入於無間。……言是以知無為之有益也。」<sup>(9)</sup>)そして下へ下へと流りたい一つの願をもつている。道の心持は自己が柔かくなることである。すべて生命あるものは柔弱がその本質であり又働である。(「弱者道之用」<sup>(10)</sup>)柔弱であるから自在に伸展する。(この意味より「人之生也柔弱、其死也強堅。草木之生也柔脆、其死也枯槁。故堅強者死之徒、柔弱者在之徒。」<sup>(11)</sup>)と説いている。) 勢力という事でも自己を中心にして、これだけが自己の味方とすると、他は味方ではないから勢力があつても自己の勢力以外から脅かされて無敵の強さは感ぜられない。強

弱が問題となるのは真に強いのではなくて弱いような気がする所がある爲て、「我」が碎けていると相手どるものが無いから強弱を超えて無敵の立場に立つ。「合徳之厚、比於赤子。汚蟲不螫、猛獸不噬、攫鳥不搏。」<sup>40)</sup>も、それを象徴した言葉で、眞の自己は何者にも傷つけられることはないのである。

本来道には何の目的標準もない。無目的即一切目的といつた「素」的な働が道の働であり又無乳無條件の生活の姿である。「我」の見地では分化対立の相だけしか見えない。従つて相手どる何か目標を立てそれを固執していないと生活が成り立たない。そこで対立は一層きわだつてくる。道は分化の諸相を包容し、対立の相を固執したりそれに凝滞することなく、それを超越して全体的働となつている。人間も「我」が溶けて自己と生命力とが「不二」の活躍をはじめると、相対は明瞭であるが、致てどちらでなければということがなく、それをきわだてる必要がなくなる。此の如く個が道に反つて活動している時には、老子の所謂「明道若昧、進道若退、夷道若類、上德若谷、大白若辱、廣德若不足、建德若偷、質實若渝、大方無隅。……」<sup>41)</sup>であり「大成若夷、其用不弊。大盈若冲、其用不窮。大直若屈、大巧若拙、大辯若訥。」<sup>42)</sup>である。(ここにいう明、進、夷、上、大、広、建、質はすべて道の姿を象徴した言葉であると私は解している。老子は折んで道説の篇を立てているのではない。これが寧の象徴である。)これ分化対立の相に腰かけて停滞している下士の道を聞いて大いに笑う所以である。(生活の重点が外物にあると一種のハリを覚えるであろうが、「我」の殻の中の善悪を究め、目的通りにならぬと不安焦躁に取られる。それが「無我」になつて、生命そのものの働になると、重点の置き所がかわつて、善悪損得も「我」という狭小な所に於ての問題ではなく、広くなつて来るので口にも言ふことも出来ず、又そう定めなくてもよい。(それ等に拘泥しては生命が凝滞するのであるから)それで何事でもどちらにも動きがとれ、強いてどうでなければならぬことなく、心に余裕が出来、長い眼でものを観ることが出来、少しボンヤリしたヌケタののではないかとの感がある。老子第二十章はこの時の感じを一篇の抒情詩といつた形で表現したものであらうと私は考へている。)

さて、あらゆる因縁が集中して一点に歸する所に我々の今の生活がある。その進展が如実の相である。それは無目的であり無手段である。手段や目的でなされる生活は本當に生きているのではない。小さな人間の考てわざとこしらへている相である。或る一局面だけを重くみて、その他あらゆる相、無限なる方面(全体)を顧みない生活である。それは本當の相から無限に隔てられ生命の中心に触れていない生活である。従つて眞の生き甲斐も感ぜられず、何時も果敢ない氣持に襲はれていなければならぬ。

生活はこの自己全体を捉へての日々の創造である。それも外に目的も標準も手段もあるものではなく、自己そのものの中から湧出する生命が新なる價値を創り創りして進むのである。それは一面根源より離れ過ぎることであるが、生命には外に固執すべき目的も標準もないので、過ぎかれば反ることを知つて、それ等創り成した物に停滞安住することなく、それ等をとび越えてゆく。超越ということは生命(道)の働で、外物に停滞安住しないこと進む相である。そこに生甲斐も感ぜられ、本當に仕事も出来、人生の無限の妙趣と絶えざる新鮮味がある。この際に得られた偉大なる直観や内面的調和の感動は自ら韻語(詩)の表現となるもので、それが老子の言辭であると私は考へる。(老子の書には有韻の文が多い。そしてこれが古いもので老子の言葉とされている。然しその有韻は傳説に便する爲にこの形をとつたものである(武内氏老子研究)といわれているが、それは詩の境地や、東洋的悟道の境地を無視したもので、私のやうに解して老子の文の表現法がよく理解出来るのではないかと思ふ。)

そこで自己の周囲に集つている金や地位や凡ての物は生命の創り出したものではあるが、それ等の物は生命の一種の残骸ともいふべく、眞の自己そのものではない。眞の自己はそれ等のもの



を其処へ現に集まらせた生命の力で、生命に力があればそれ等の物に拘泥しないで（「保此道者不欲盈」<sup>(9)</sup>）のである。盈はそれに拘泥し凝滞する意である。）それ等を生命の養として更にそれ等を超越して進むのであるが、その力が生命に乏しいと、それ等に安住して、その下積となつて衰亡してしまふ。「持而盈不如其已。揣而銛之、不可長保。金玉滿堂、莫之能守。富貴而驕、自遺其咎」<sup>(9)</sup>とはその外物に凝滞するが爲である。そこで「功成名遂身退」という「天之道」によらねばならぬ。こゝに退というのは隱退というような消極的意でなく、功成りて居らずと同じく、功名に停滞しないで生命に反つて活動を進めてゆくという意味に解すべきであると私は考える。人間は早くよりこの点が分らなくなつて、眞の自己を喪失して生活の重点をそれ等の物に置くことが第二の天性の如くなつて了つた。その爲命や地位や名誉やその他自己の周囲を比較して價値を定め、又それ等が思うようにならぬことを自己が行詰つたと考え、そればかりに苦悶してそれが人生であり生活であると錯覚して迷つて來たのである。老子は「名與身孰親。身與貨孰多。得與亡孰病。故甚愛必大費、多藏必厚亡。」<sup>(44)</sup>と。勿論それ等の物は有るに越したことはないが（無ければ無くてやつてゆけるのである）それは生命の養としてであつて、それ自身に絶対の價値があるのではなく、價値はそれ等のものを創り出した生命力（道）にあつて、それ等のものに邪魔されてはならない。生命そのものの働とそれ等の物とをかけ代えて同列にさるべきものではない。これこそは何物にも代え難い宝であつて（老子は曰ふ「道者万物之奥、善人之所守、不善人之所保……」<sup>(60)</sup>と。）自己とはこの宝をさしているのである。かくて自己全体の生命力を發揮する時には不惑であつて、外を尋ねるに及ばず、金や地位や名誉や他人の思惑や自己の性格や出來の良し悪し等に拘泥することは一つもなく、己の生命のいらざる重荷の爲に苦悶することがなくなる。こゝに立つて老子の價値観をみるべきである。老子は常識的生活（「我」）よりすれば、人の肯定するものを否定し、否定するものに價値を見出し、その言辞も甚だ游説的で、價値観を顛倒しているという。然し老子は好んで形而上学的に否定道を歩んで價値を顛倒する言辞を弄しているのではない。「無我」よりする事の眞相を語っているまゝである。

道の生活はその人の生命が全体として非常な活躍をしているのである。（所謂本気なのである）これこそ美的境地であり、美的人格の全露出である。藝術もこゝから生れるものでなければならぬ。従つて日常の生活で平凡と考えられる事にも全生命が打出される。そこに無限の妙味が出る。（即ち衆妙之門である）これが道の生活の常態である。そこに平凡が非凡となり、小事が大事となる。これが眞実である。（全生命を打出すといつても、力むこと、こることは道と正反対である故、力まなくそこに眞実が現われる。）「我」「欲」が根本的に碎かれて全体として働く人格と生活には一種の表現し難い「香」を伴ひ又威光をももつ。（仏像仏画に後光があるのはやはり徳の光と力を具体的に現わす表現法であろう。）この香と光によつて道の心は次第に周囲に傳わり、道の心と呼び起し、それが一つに融合して働いていつているのである。

自己の生活は自己の生命がするるのである。そこに積極的自律の緊張味を覚え、眞の自由を得た感がある。少しも窮屈を感じない天地の中に立つ雄々しさがある。そして力むことも強がることもない。実に柔かであり微かである。微かではあるが実に強い。それは何物でもないけれども一切である。

我々の存在の基礎である生死が既に無条件である。死んだ人は限り無いが、固より生きることにも限り無い。自己は無限の死と無限の生との一つになつている所に立つているといえる。その処が自己の生活である。道には増減がなく、無限であり永遠である。この生と死との「不二」の有様は道の生涯である。道に生きる者にとつてはそれと別に永遠の生活や所謂靈魂不滅的存在があ

るわけではない。

## V

老子は相對の事を視ないように、関係しないように、強いて絶對の境地に遊びようとしているのではない。現象界は「有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音声相和、前後相隨。」<sup>(2)</sup>であり、又「凡物或行或隨或歎或吹、或強或弱、或挫或隳。」<sup>(3)</sup>であり、「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏、孰知其極。……人之迷、其日固久。是以聖人方而不割、廉而不劌、直而不肆、光而不耀。」<sup>(4)</sup>で、万物は皆相對的存在であることを認めている。絶對であるから個々別々の存在、有無、彼我、善惡、美醜、利害等々の相對界が空に見えたり全く無意味になるのではない。老子は寧ろ相對の事物に苦惱し、この苦惱をいかに処理するかと、そこに凌頭している中に次第に絶對の世界からともいうべき光明がその中から輝いて全体を照し出し、その風光が自ら一変して道を体認し、それを語りもし記しもしたものであろう。道によつて現われたものには何一つとして無意味なものはない。それが無意味になるのは「我見」の働からである。それ故に「聖人居無爲之事、行不言之教。」<sup>(5)</sup>であつて、「我見」の働をしないのである。

生活の中に絶對の風光が輝き浸み出て來れば來る程相對のもの事がよく見え、その取扱が行届くやうになり、相對界に益々深入りすることが出来る。即ち「無我」によつて、分化された現象界の内に潜んでいた統一の力（生命力、道）が活潑に働くのであるから、分化された現象は一層よくわかる。相對界を避けるのではなく、一層そこへ溶け込んでゆけるやうになる。（道のわからない時には何事とも一つになれず、「我」の殻の中で、相對界を外側からばかり形式的に批評的に取扱つて、その物事の真相も味もわからなかつたのである。） そうなることによつて絶對の味が一層深くなつてくる。（相對界を避けるやうではその絶對のものの中身も変な怪しいものになつてしまう。） 老子はこの境地を一篇の詩の如く表現して「知其雄守其雌、爲天下谿。爲天下谿、常德不離、復歸於嬰兒。知其自守其黑、爲天下式、爲天下式、常德不志、復歸於無極。知其榮守其辱、爲天下谷。爲天下谷、常德乃足、復歸於樸。」<sup>(6)</sup>といつたものと私は考へている。（雄は分化された相對界の諸相を意味し、雌はそれを統一する生命力、絶對を意味するものと考へる。） この相反するが如き二つの極致の心持が一つに動いて何の凝滞もない。そこには無限の動と共に無限の靜がある。これが道そのものの働で、その現れである「無我」の境地の不思議ともいうべき働がある。「我」そのままの氣分では到底わからぬ所である。

差別と平等も「我」を働かせている時は差別といへば差別に囚われ、平等といへば平等に墮して差別をよく見ない。即ち「天下皆知美之爲美、斯惡已。皆知善之爲善、斯不善已。」<sup>(7)</sup>であつて、「我見」では美なるものに執着して他の美が見えず、却つてその美なるものが苦惱となつて悪くなつてくる。

例えば妻子を思うということに就いても同様で、道の生活になると差別が無くなるから妻子も思わなくなるやうに考へられるが、それは妻子を忘れてしまうのではなく、妻子のみに執着して思う時の心の惱が消えて道に根ざした清い愛に自身の心が何時までも保てるやうになつたことであらねばならぬ。道の生活では凡てを愛する。それに妻子が忘れられる筈はない。即ち凡ての一つとして妻子も愛せられる。そうなることは妻子だけを愛していた時に比して愛が薄くなるかという、そうではない。凡てを愛するということは「我」に根ざした今までの愛の中に潜んでいた惱のもとになる不純なものが淨化され、凡てに及び得る純粹な愛になつたということである。

實際の生活に於てはもとより一人一人に対して愛を現わしてゆくのである。凡てを愛するからとて目前の妻子を身かにすることはない。目前の妻子を愛する愛し方が凡てを愛する心持と衝突

しない愛し方て受ずる意味である。妻子に対して今までは執着した不純の愛で、他に對して支障を起す愛であつたのが、道の生活になつて淨化され、誰にも支障のない愛を感じるやうになつた意味で、これこそ本当に妻子を思うことである。妻子だけに囚えられては凡てを失うこととなる。

一つの美なるものに囚われると凡ての美なるものが悪くなつて了う。一つの美なるものを離してしまふ所に凡ての美なるものが一時に集るのである。「怨衆人之所惡」は一切に囚われない所で、そこが一切のものの集る所である。「聖人後其身而身先、外其身而身存、非以其無私邪。故能成其私。」<sup>1)</sup>というわけである。

道の生活は差別に囚われぬ所はあるが、差別は絶対に重んずる。差別の相はどうしてもよいというのではない。差別の相は必然で、その他に在り様がない。それをそのままに認めて而もその差別の相に囚われる所なく自由である。必然にして自由、自由にして必然、それが同時にそこに在るのが道の生活の妙である。従つて道の生活では有無を放れ彼我を絶し更には死生を超えて、そこに一切が溶融して絕對の生命（道）に生きるとともに、同時に、有無の差別は一層鮮かに、彼我は乱れず、生死は明瞭で少しも混同されず、生かされて生き、死なされて死んでゆく生命そのまゝの充實した無限の伸展があるのみである。

次に老子の道の生活は原始的野蠻な生活のやうに誤解されているが、そうではない。寧ろ段々進歩して人間の生活が一番高い段階に進んだ所であると考えられる。道の生活では「無我」であるから、色々な事物の眞相がよくわかり、凡ての味を正しく清く豊かに味わうことが出来、偏したりひねくれたりせず、人生の大道を眞直ぐ進んで、出るべき所、到るべき所へ到るという所がある。故に人間の生活の最も進歩発達した段階で、原始的野蠻なものではない。たゞ道の生活では同じ衣食をするにも「我」でする場合と變つてくるので、その心持は清められ無限の豊かな味をもつているので自然に生活が單純質素になり（場合によつては衣食が乏しくなつてもそれも苦悩にならない。）衣食住の如何に拘らずその生活の味は十分味わい得られる。（古來道に生きた人は多く質素な生活をしているのも、生活全体が「無我」であらから、大体に於て生活の資料を自己の所に無理に餘計に集めて費滅することにならないで、それを他の必要の方へ廻すやうにした為で、道の生活と素質とが不離というわけではない。許されぬ豊かな生活を樂しむのである。）道の生活は自然生活の中からにじみ出て自然生活を高め清め強めてゆくもので、自然生活を無視するものでなく、又それと衝突したり矛盾したりするものではない。

道の心持は一切の囚われから自由になされた人間生命の姿である。従つて一切の文化を包容し、生命力を失つてゐる文化をして文化たらしめるものである。如何なる文化の姿もそれを否認したり、それと矛盾し逆行したりする態度は取る氣にはなれないもので、一切の肯定が先立つ。一切を肯定してゐて色々な冬の間に混亂が起らず、凡てが整理されて着々と進んでゆくやうにしてゆくものが道（生命、無我）の徳力である。それはあらゆる執着に囚われぬのであるから、道によつて始めて文化が本當の進展を遂げてゆくのである。道といへば俗には文化の原始的状態に相通するものばかりに見られ易いが、そんなものではなく、一切の文化の段階を通じて道はそれを裏づけして行くもので、如何なる文化とも矛盾したり衝突したりはしない。近代文化が行詰つたという声をきくのは道を無視し、道の裏づけのない浮華の如き文化なるが故に行詰らざざるを得ない。老子の時代に於ても同じく周文化の腐爛行詰に際した。老子はそのやうな文化が却つて人間を害していることを認め、すべてが形式化して世間では我欲と虚偽との余りにも深刻なことを痛感した爲、文化をして文化たらしめる道に帰るべきことを強調し、その爲、無知無爲を云い、形式化した仁義や人間の虚偽を増長する知や学を斥け、愚になる（實は無我に反る）という深刻な言辭で所謂文化を罵倒して、そこに言辭の端に激した所が見えるのである。文化を無視したものは

ないと私は考えている。「見素抱朴」の素樸も尚そのを象徴した言葉で、分化されない生命力そのものを意味する。

( 結 )

老子に於ける道の生活は人生の大途であり、何等の曖昧無理もなく自己を十分に生かし自己全体を完全に発渾して又全体と一つに生ききつている。そこには迷信的な要求や怪力乱神的なものではなく如実の相で、実に透徹した一筋のものによって貫かれている。(但し中国の古典、殊に思想家の書物にはその本来の思想から発展転化した末流に附加したものや、古い注の竄入したと考えられるものが相当にある。老子にもそれがある。後の兵家言、法家言とみられるもの、或は醫謀家、神仙養生家の説の如きものが往々にして見えるので、その点は厳明して考えられねばならない。本篇でも老子の道の心持と抵触しないものを引用しているつもりである。尚、中国の古典には、算術があり、又漢代の校讎整理の際の変化と考えられるものや、傳写写刻による訛脱もあるので、この方面からの本文の整理も必要である。)「無我」はその一切の事が問題にならない自由無碍な境地で、生命の自らなる成長進歩に順うものである。(これに対して、祈禱ということは偶然の結果をおかけと喜びことであり、礼儀ということは自己の努力で良くして行こうとする向き方で、老子の道はこれ等の向き方とは自ら異なる。)

人間のあらゆる苦惱をその依つて起る根本原因から救済せんとするものに社<sub>レ</sub>改造の運動と宗教とがある。兩者はともにその流派が色々あり、それに携はる人々の徹底さ真剣さに於て容易ならぬ問題がある。然し社会改造がいかになつても、自己の生活がその中に於て支障が起らず、社会の一員として恥ぢない生活(即ち「無我」の事象から出発して自己のものは自己のものであつて又何一つ自己のものでないという徹底した生活になつていれば、境遇の如何にかかわらず、自ら進んで喜んで仕事が出来、いかなる人にも何物も對て視しんで分けずけるであろう。)になつていればよい。即ち利の囚われ情の囚われ理の囚われ法の囚われ(教団宗教にいい)ないことは、すべての囚われから解脱しても、法執ということが最後に残つていることで、これを「縛をなす。)から解脱して眞の自己の天地に生ききる事になつていればよい。これが老子の道の働である。このやうなものが宗教と呼ばれるのであつたら老子の道の教は宗教とも謂える。古代に於ては宗教も道徳も法律も一体たるべきものであつたのであるが、人文の発達とともに三者に分化したが、三者ともに「我」の迷妄を打破して自由無碍な眞の自己を確立せんとする実践法を本質とするものである。老子は道を一つの神(神という言葉は色々な内容を料つ言葉であり、やゝもすれば、与えつける力を料つもので、我々の生活の正確さをも自由さをも奪うおそれがある。)として立てし信仰の対象とし、罪の子、懺悔、慈悲、救済、極樂といった用語形式によつて所謂宗教を開創することをしないで、あくまでも人間世を離れることなく、現実の聖人を立てて人間の脅威に於て自主自由な人哲の発渾という点に於て解決しようとしたのである。(この点、中国的である。従つて、老子はやがて神仙思想に結びつけられ、又民間の素朴な信仰や仏教傳來に刺戟された道家の徒が、その實踐的基礎を老子に求め、道教に展開してゆくことも首肯出来る。)

然し道、無我の消息は容易に分らない。所謂日常生活にありふれた喜怒哀樂愛憎慾の心持ならば皆日々やつていることで、話にしてもすぐわかる。老子の表現しようという境地は普通の心持を超えた境のことであるから、喜怒哀樂の情に訴えての話では何にもならない。いわば全く新しい世界(然し固よりこの人間世を離れた別の世界ではない。)の消息を現わしているのであるから、話の材料や筋書や舞台や役者は似ていても、現われているのは普通常識の生活の模様ではない。普通常識の生活は既に行詰つて、それを投出して求めて終に與えられた新生活の有様感を現わしているのであるから常識の考え方では所詮分る訳がない。(又言語文字は常識の道具で、常識での共通した経験や心持を夫々すには都合よいように昇進しているが、それを越えた新しいものを記すことは困

難な所がある。) そこで老子は、形而上学的空論と考えられたり、社会道德の無視や本能の満足であると曲められたり、消極的内容の無い虚無無為主義や単なる無抵抗主義、敗殘者の宿命論や超然高踏の獨善的否定的エゴイズムであると誤解されて來たのも、「無我」の消息がわかり難い爲である。そこで末流や摸倣者には似て非なるものも沢山起る所以である。然しその新生活の事實は動かすことの出来ないものであり、又人間の感得力は靈妙なもので、それが何時とはなしに感得せられ、個人をも社会をも救済して傳えられているのである。

この新世界は別な所に在つたのではなく「無我」が必然的に生活全体の上に常に現われるやうになる所に開かれるもので、道の生活によつて自己が一番自己らしい自己になるのである。故郷を遺棄して放浪苦惱した者が常に自ら帰りたいと憧れている故郷の消息のやうなものである。そして「無我」の氣持がよいものであることは大抵の人が多少は経験して知つてもいることで、実は万人の求めている道なのである。(たゞ「天下莫下知而莫之能行」<sup>(57)</sup>である。

常識の見地では人間の生活は相対的なもので、何かを相手どる所に成立するものであるから、その間に於て生活を比較的善く清く美しくする爲に宗教とか哲学とか藝術とか文学といったものの作用があると考えられている。(これ等のものの人生に當る態度にも色々あつて、自己全体を以てせず、部分的に一面からのみ頭の中で人生を取扱っているのでは、いくら精練され進歩された所まで進んでいても、すぐ出来事の爲に破れ、すべてを解決して動じない救済の力を持たない。それでは、不安、淋しさ迷もどうにもならない。)然し事實はそれ等相対の囚われから自由になつて根本から救われた所に眞の善美清が生ずるので、「我」をそのままにして外物の力を假つての美しさは、美しく見えても濁があつて、すぐ空なものになつてしまふ。

生きるということは肉体が呼吸したり脈搏がありさえすれば生きていくという、そんなものではない。それは生理的に生きていくにすぎない。人間には生理的とともに理性的生き方がある。道の願によつて生かされて來た人間は道の願に帰つて道の心を心として生きねばならない。それがあらゆる生活に現われて無限によい調子が出て、自己、人生を讚美することになつて本当に生きていくということが出来る。

人間は道を明かにしない限り人生は夢である。その夢中に夢を見てあらゆる「我」「欲」に心身を勞する。然し多くは思うようにならず、偶々思うようになつても頼みにならない。道を明かにして世に立てば外物に弄ばれずに眞の自己で自由に生き得るのである。眞の人間の社会は眞の自己を知り、人を知り、人を愛し、人を樂しむ社会で、その爲には「善建者不拔、善抱者不脱。子孫以祭祀不輟。修之於身、其德乃真。脩之於家、其德乃余。脩之於郷、其德乃長。脩之於邦、其德乃豊。脩之於天下、其德乃普。」<sup>(64)</sup>で、世界の平和もこの根本から出発する。これを空想視して英雄の出現や制度といった外的力にのみ期待する者は生命の力の何者たるかも知らず、社会の創造的眞理を解せぬものである。今日教育や政治は勿論、あらゆる平和運動、道德運動、文化運動も、その根底に於て「我」を溶して、「道」より「無我」より出発した信念のないものは皆いゝかげんのもので、だめである。天下の垢を受け、天下の不祥を受ける者にしてよくする所である。(例えば戦争放棄ということも古来すべての宗教の求めて止まない理想の世界であるが、その為にはその国が道の国となり、國民が無我無欲の國民となつていなければならない。相手を持たず対立のない立場に立ち、自他一体の動きが国を挙げて動き出すより他に道はない。絶対平和の道を命かけて歩み出した国は世界民族の希望の光であり、その国を失ふことは人類の光明を失ふことで、世界の人類がその国を立ててゆかなくてはならぬと思ふようになつて戦争放棄の国は立ちゆくのである。「我」をそのままにして、単なる平和の理念や戦争放棄の宣言だけでどうにもなるものではない。)

老子の「道」は神秘的なほど唯心的である爲に、現代實行の唯物的機械的思惟しか出来ない物

的人間は之を聞いて人間的でないと大笑するであろう。彼等は人格と人体とを取違えているからである。そこで現代は社会制度についての研究と批判とは豊富になつたが、個人の靈性に対する自覚は空疎であり、環境の影響は万能視するが人格の威力は之を舍いて問わない。自己を喪失し人間生命力の稀薄となつていること今日より甚だしきはない。生命力をもたない文化は人間を幸する眞の文化ではない。老子もその昔この点を徹底的に内省し、道を究見し、「無」の教は傳へられたのである。

人間というものは実には宇宙の生命の最も進歩した最尖端を進みつゝあるものである。生命の働は最もよく人間に現われ、その力も、その美しさも、豊かさも人間に於てこそ充分に見られるものである。人間を通して無窮の生命がその営みを進めてゆく。老子の書は即ち、この感動の記録でもある。それは「無我」の一点に集約されている。無我、無條件は「道」の極意である。